

【事例報告】

視点を変えてみる！～「アイアンシアター」からの報告～

北九州市枝光本町商店街アイアンシアター

運営代表 鄭 慶一氏

枝光本町商店街アイアンシアターという民間の劇場を運営しています、鄭 慶一と申します。

簡単に自己紹介をさせていただきます。鄭 慶一という名前からご推察いただける通り日本人ではございません。在日韓国人の4世です。曾祖父が日本の田川に渡ってきて個人で炭鉱を開いて一山あてたのが始まりです。

現在、私は民間劇場の枝光本町商店街アイアンシアターという劇場の運営をしております。さらにもう一つは、商店街を舞台にした野外の舞台芸術、ダンスや演劇、音楽のフェスティバル「枝光まちなか芸術祭」というものを主催しております。

アイアンシアターは、2009年に開館して来年で10周年になります。演劇やダンスを主に上演しており、運営は完全に民間です。

この施設はもともと福岡銀行の枝光支店の跡地、建物自体は昭和58年から現在のままです。

次に枝光まちなか芸術祭、2014年から始まりまして、今年はお休みしましたが、去年まで4回やりました。来年またやりますが、枝光本町商店街という商店街を舞台にした野外の舞台芸術フェスティバルです。

これはフェスティバルの様子で、アイアンシアターを使ったり、商店街の道路を封鎖して、お客さんもいっしょになって踊ったりしている写真です。あと商店街のアーケードの中で、あれはダンサーさんとギタリストさんのコラボレーションしたプログラムです。こんな感じですごく楽しい瞬間です。素敵なフェスティバルだったと思います。

活動拠点にしている枝光本町商店街は、北九州市の八幡東区、枝光という場所にあります。商店街は、70から80メートルぐらいの道路に面していて、店舗数が約21店舗です。この地域は、高齢化が今36%、2017年の数字ですが、高齢化率の高い商店街で、左上の写真が現在の様子です。左側にジェットコースターが見えますが、あれはスペースワールドです。そのスペースワールドの商店街に面しているところが、東門だったかな、八幡製鉄所の門があって、勤めを終えた沢山の人がどんどん溢れてくるっていう状態で、70年代、80年代初頭だったと思います。この写真は確か商店街でもちまきかなんかのイベントを行っている時のものです。本当に人が多くて、地元の人はこの当時の話をよくされます。

今回、ボランティアフォーラムで事例報告をしてくれないかということでお話をいただきましたが、僕、実は、ボランティアと言う言葉があまり好きではありません。

今までアイアンシアターの運営でボランティアさんを募集したこともなく、僕自身もボ

ランティアとよばれる活動に応募したこともありません。

しかし、これを機に一回ボランティアについて少し考えてみることにしました。

考えてみるに、やはり一番初めに頼るのは **Wikipedia** ですね、どうしても。

Wikipedia で「ボランティア」を開いてみると、「社会活動に、自発的に無償奉仕をする」と書いてあります。なるほど、自発的に無償奉仕。

オリンピック・パラリンピックのボランティアの話も先ほどありましたが、ボランティアって基本的に募集がかかるようですね。しかし、募集がかかる時点で「自発的じゃねーな」と思っていますけども（笑）なんだかおかしなことになっている気がします。

すごく穿った人間なので、なるほどなるほどと。

それでは僕なりに少しボランティアを考えてみよう、とってすごく単純化してみました。

まず「誰」かがいます。「困ってるんだよな」と書いて、それを見た誰かが「それ、できるわ」と、その人がそれを **Give** (してあげて) して、その誰かが **Thank you** というまでの流れがボランティアだなど、個人的には思っています。そこまでの流れが大事だと思います。

次には「これ、案外とボランティアの定義が拡大してきたぞ」と思って、先日『ボランティア飲み会』というのをやりました。25歳から34歳までの男女がアイアンシスターに集まって飲み会をしましたが、そこで「これもボランティアじゃないかな？」という話をたくさんやってみました。

「それボランティア」、「いや、それボランティアじゃない」みたいな話をしましたが、ほぼ全部ボランティアでした。その事例を紹介します。

「まず被災地の水が足りない、地域に水を届ける」「最寄り駅のゴミ拾いをする」

「マラソン大会の給水所でお水を渡す」「地域の餅つき大会でお餅を丸める」

これも多分ボランティアですよ。

じゃあこれはどうでしょう？

同僚が今日の午後から出張だ、「出張に必要な書類をまとめてあげちゃおう」

これもボランティア？

「友人の彼女が誕生日だ、二人の未来のためにサプライズを一緒に考えてあげよう」

もちろん、これもボランティアであろうと。

いつも朝ごはんを作ってくれるお母さん、少しでも楽をしてもらうために「お米を夜のうちにセットしておこう」「手先が器用だから友達に花輪を作ってあげよう」

これもボランティアです。

自宅のついでに「隣の花壇も手入れしてあげよう」息子の運動会で「朝、テントの設営手伝おう」駅でおばあちゃんが大荷物、階段で「かわりに荷物をもってあげよう」

道のわからない外国人観光客に「道案内してあげよう」

これらは、ボランティアですよ。実に、この世の中にボランティアは溢れています。これはすごく楽しい飲み会でした。

僕は、ボランティアがあまり好きじゃないけれど、「今度ボランティアフォーラムに登壇するので、ボランティアのことを考える飲み会をしよう」といって付き合ってくれた皆が、飲み会の最後に、「お前、ボランティアの塊じゃないか」というふうに言って、「そうなんです、僕は実はボランティアの塊なんです」、日頃の行動は、ほとんどが「ボランティア！」と言って良いかもしれません。

もしかしたらですが、“ボランティア”という言葉が、実は必要ないのかもしれないと考え始めました。

先ほど、若者が、「ボランティアに携わっている」ということを友人に言いにくいという話がありましたが、今あげた事例は、ほぼ全部、僕の実体験です。

「ありがとう！」をもらいたいからやっているという意識もほぼ無く、ボランティアをやっている、そういうサイクルが実はもしかしたら大事なんじゃないかなと思っています。

先ほどのこんな状態に、誰かの「ありがとう」で〇〇をいれたら幸せになったなあという、多分この状態がいちばん大事ではないかなあ、と個人的に思っています。

僕の活動も実はその塊でして、商店街を封鎖して、僕が扱っているジャンルってよくわからない踊りなのです。そのよくわからない踊りを70代80代の店主さんに、言わば押し付けで見せています。皆な路面で踊っているから仕方なく見てしまう、そんなことをさせてもらったりとか、アイアンシアターでよく遅くまで踊り狂ったりしているのを許してもらっていると思っています。ある時なんかは商店街のお手伝いというか商店街が困っていることを僕が飛んで行って助けたりします。そうすることによって僕の活動は許されているのだなあ、と思っています。

例えば商店街でみかんを仕入れすぎて、商店街では保管場所がなく持て余すとか、何かイベントできないかなあ、と誰かいう人がいたら、僕が言うわけです。

「みかん、劇場におけるよ！今使ってないから」「ちょっとヒヤッとしてるし、いいんじゃない」とか、「置いときなよ」と。これを商店街になげると、「ありがとう、じゃあ鄭くんがやっていいということなんだったら、置かせてもらおう」と言ってもらえる。

『商店街のお手伝いしたからいろんなことさせてもらえるなあ』という循環が起きているわけです。これはこのフォーラムに登壇させていただけないと、僕は多分気づかなかったところで、本当にありがとうございます。なんと“奇跡的に！お仕事”になっているのですね、そういうことで得られる何かが大切なかもしれない、というのは個人的に重要だと思います。

ここで大事なことは、携わる側、参加する側と募集する側で大事にしたいこと、それはコミュニケーションがとれているかどうかだと思います。

先ほど、ボランティアが、もっと情報を届けるためにはどうしたらいいかという話もあ

りましたが、SNSやチラシやホームページとかもちろん大事ですが、多分見落としがちになるいちばん大事なところは、その人のことを知っているかどうかだと思います。口コミもやはりそういう意味合いで大事だと思います。その人のことを知っている、その人の何かを手伝ってあげよう、助けてあげようという気持ちになるし、応募をかける側もこの人にならぎスギスギせずに手伝ってもらえるなあ、ということがあると思います。もちろん僕の所は小さな商店街ですので、毎日商店街に行ってみかんを買ったり、商店街のおいちゃんたちにお昼からお酒を飲まされたり、よくわからないことで夜中に電話がかかってきて怒られたりとか、そうすると僕も怒ったり、喧嘩したりするという行動は、コミュニケーションの延長線上にあると思いますね。そこをすごく大事にしたほうがいいなと思っています。例えば自治体レベルだと「それは難しいよ」と言われると思いますが、「いや出来るんです」と言ってます。

飲み会をしたり、バーベキューでもいいし、それが嫌だったら週に1回、ボランティアに携わっている人とか興味がある人と、ほんとにざっくりしたこういう形のシンポジウムをしたり、お酒の力ってすごくて、結構言い合いしたり言いにくいことも言える、そういう形でコミュニケーションを取るということをまずベースにおいたほうがいいなと思います。その延長線上に自発的なボランティアのようなものが生まれてくると。

それが出来ると多分、少しずつ社会も上手くいくようになると思います。

先ほどの「アーティストが無償で！」という話もありましたが、アーティストも社会に寄り添わなければいけないし、社会もアーティストとかアートにもう少し理解を示すというシステムにする、これもやはりコミュニケーションだと思います。そういった形でお互い寄り添っていく状態をずっと続けるのが、一番持続可能性が高いことだなあと思いますし、そういうふうにして社会をまわしていくというのが、僕は枝光という商店街で学んだことで、その循環はずっと続けていきたいなと思っています。

僕が今、目標として考えていることは、僕が死ぬまでこの商店街で“何か面白いこと”をやり続ける、ということがテーマです。そうするとやはり商店街の人のお力を借りないと何もできないので、普段からそういうコミュニケーションをとったりすることが必然的に必要になってきます。何かしようとして人が足りない、ボランティアが要るっていうサイクルではなく、基本的に何も出来ないから、まず、商店街の人たちとコミュニケーションをとっておいて、そのあとでボランティアを募集するために必要なことを考えなきゃいけないなあと、募集する側は事前に“何かを Give する”ことは考えないといけないと思っています。

すごく単純な話をしますと、アイアンシアターにはボランティアの募集なしに勝手に手伝ってくれる沢山の方がいらっしゃいます。

結婚式で僕がアイアンシアターをちょっと離れてて、帰ってきたら何用の棚かもわからないのですが、棚が出来ていました。

これは何だろうなと考えると、「鄭くん、こないだ屋上でバーベキューしてくれたときに、

自分の靴を置く場所がないみたいなことを言ってたじゃないと」「ああ言いましたね」

「あ、うんうん。なるほどなるほど・・・」と、納得できるわけです。

事前に僕側からの Give があったわけですね。それは Give したつもりではなく、コミュニケーションの場がたまたまバーベキューの時だったというだけでした。

募集する側の僕が、たぶんそこを少しないがしろにしたのではないかなあ、と思います。

募集する側で〇〇のイベントがあって、何か一つ手伝ってもらいたい事などがあれば、その前段階で、情報を与えるコミュニケーションが是非とも必要だなあと思います。

そこをしっかりと伝達する方法とか、コミュニケーションを重ねることで、募集される側では「こういうことなら出られるよ」と認知されることに繋がるのではないかなと思っています。

小難しい話が苦手なので、ちょっとラフな感じでお話をさせていただきました。

もし何かご質問でもあれば、お声掛けしていただければ何でもお答えします。

これで終わりたいと思います。ありがとうございました。